HPJ製作工房・おりほん10

# Twitter300字ss

2016年02月～2016年05月

森村直也
@hpjhal

twitter企画、Twitter300字ssに
提出した作品集です。
Twitter300字ssについてはこちら
http://privatter.net/p/310549

## 別れ～さよなら、みんな

2016/02

ソレはやさしそうな声だった。ノックと共に入ってきて、まずはアンを手招きした。
アンは怒って泣いて笑った後で、頷き部屋を出て行った。
出会い続けた僕たちの、それは初めての別れだった。
次にはサトが。チィもニヨも。話して頷き、笑顔で出て行く。
最後にロウが笑顔になって出て行くと、ついにソレは僕の方へと向き直った。
「僕も行くの？」
いいや。それは否定の言葉だった。
「君は行かない。君は残る。残って一人で生きていく。わかるかい？」
がらんとした部屋の中、ソレは言う。僕は、一人。
「だから」
頬に触れる手が温かくて。
目を開ければ白い部屋。診察室と呼ばれる部屋。
「君でない人に会えるんだ」
僕は一人で、その人の前に座っていた。



## 別れ～そして僕らは夢の中で出会う

2016/02

「事象の地平面で量子もつれとなった光子対を想像して欲しい。量子もつれを保ったまま別れた光子の一方はブラックホールへ落ち込み、もう一方はこちら側に残る。従来、ブラックホールは特異点とされ情報は保存されないと考えられていたが、量子もつれ状態の光子は空間を超え情報を伝え得る」
声を音と感じ始めると現（うつつ）との別れが近い。重くなった目蓋は別れ難いと主張を始め、しばしの別れと断じたはずの優しい闇が手招きする。「ガマンは良くないよ」昔に別れた声まで耳の奥で誘い始めた。
——そうだね。ほんの少し。このひとときだけ。
夢と現の地平面を飛び越えて。
——別れるために、また会おう。

＊

「君は単位とお別れしたいのかね？」



## 風～時を回す

2016/03

男が足を踏み入れると、凪いだ地に風が起こった。
風は木々を動かした。木は火を生み営みを支え、灰は農の基となった。土あらば金が掘られ、金を用いて水が呼ばれた。水は木々を育んで木々は風の褥となった。
男は女を呼び寄せた。彼らは子供を幾人も設けた。
旅人が風と訪うこともあった。風を乱して去るものもあった。
男は風のうちにあり、風は男の周りを吹き続けた。
やがて子供は巣立って行った。
女は風巻く中で息を引き取る。
男は地面に仰向くと、風を吸い込み大きく吐き出し、そっと呼吸を。
静かに静かに、世界は凪いだ。
風は変化だった。
風は歴史だった。
風は。
観察者の消えた地（領域）は時（クロック）を止めて眠りにつく（スリープする）。



## 風～華炎新風

2016/03

——宝探しをやってのけた。
地球軌道に浮かぶ数多のデブリの合間に漂うだけの大型船。残っていたら奇跡だとも、他人には言われていたけれど。
——だからきっと運がいい。
修理が済んだ船体の風すら生まれぬエアロックへ。借金が化けたリキッドエアをここぞとばかりに流し込み。
ごうと確かに響いてきた。
「馬鹿よね」
ため息つかれる目の前で、全身土に塗れていた。裾の油に目を止めて、にやりと不敵に笑みを返す。
「もうじきこれがラー油に変わる」
有機肥料の新鮮野菜に生の肉。油飛び散り炎が舞う。火気厳禁、衛生条件厳しい宇宙など知ったことかと無認可営業。
「俺は新しい風になる！」
新設した誘導灯へ今日も中毒者（ジャンキー）が寄っていく。



## 子～大人の要件

2016/04

「キミはお姫様。王様を助け国民を守る、賢く美しいお姫様」
「キミはサッカー選手。誰より早くコートを駆け抜け、ボールをゴールへ運ぶんだ」
一人一人をまっすぐ見ながら物語を語ってみれば、現実をただ映す目が次第に輝きを帯びていく。
「お姫様は優しいのよ。だから我慢するの」
「強い選手は弱い者いじめはしないんだ！」
ごっこ遊びは社会を作る。社会の中の役割を知る。
そうして子供は大人になる。
「先生、私には？」
生まれ溢れた物語を映して炎が揺れる頃。
卒業間近のキミの唇へ、人差し指をそっとあてる。
「大人になるなら、キミだけの物語を作らなくては」
「じゃぁ」
指が取られ。現実（いま）と夢とを映した瞳が近づいて。
物語が動き出す。



## 子～彼女の役割

2016/04

彼女の笑みは無防備だった。顔を赤くして怒り、くしゃり歪めて涙をこぼす。くるりくるりと表情を変え、ぱたぱたと落ち着きなく走り回る。
そうして皺を刻んだ母はため息を。
「ママを困らせないで」
はい、ママ。ごめんなさい、ママ。怒らないで、ママ。ママ——大好き。
彼女が笑むと母は笑う。幸せそうな一人の母の顔をする。
遠く鐘が響く頃、うつらうつらと始めるまで。
「そろそろ行こう」
車椅子をそっと押せば、母の視線は彼女を追う。
「ママ、もう寝る時間だわ」
「あら、もう」
彼女が促し。母は納得するように欠伸を漏らす。
私を決して見ないまま。
彼女は無表情に右手を出す。私は契約通りの封筒を。
「明日もよろしく」
彼女は頷き、踵を返した。



## 地～基（もとい）から

2016/05

頼りのない足下が力強く変わっていく。這って歩いて転んで転んでいつの間にやら立ち上がり。土だらけになり泥にまみれて、埃に潤み緑を嗅いで。やがて伸ばした両の手は空と自由を掴んでいたね。
こぼした涙が吸われて消えることもあった。黒いしみが流れていくのを見ているだけのこともあった。
踏んで固めたその年月、草さえ生えないけもの道を、走る音が聞こえてくる。覚束なさがひとつになって、時には伴い行くこともあり。しょぼくれ引きずるような夜や、跳ねるような朝を重ね。
背負った翼を大きく広げ、締まった基（もとい）をしっかと蹴り。きみはついに飛び立っていく。
「いってらっしゃい」
——疲れたら、きっと地（ここ）まで戻ってきて。